
先のことはわからない

悪者はいない

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

先のことはわからない

【Nコード】

N7161Y

【作者名】

悪者はいない

【あらすじ】

俺は強く生きたい。冬の樹のように、堂々と。居場所が無かったあの子が傍に居てくれれば、それだけで気持ち満たされる。

心底嫌いなアイツがいても、彼がいれば大丈夫。

俺は幸せだよ。ありがとう。

第一歩

「なあ、あんた邪魔だよ。」

何て言えるわけもなく、俺はまた黙って何事もなかったかのようにあいつと間を空けて立ち尽くす。

だって俺はインキヤラでチキンだし、口出しすれば袋だたきに合う確率100%。

それに比べてあいつは周りに持て囃される、人の輪に何食わぬ顔で入っても誰にも受け入れられるような野郎だし。

耳障りでもぶつかっても陰口言われようとも、俺の存在はそんなものだから気にしない。

こいつには敵わない敵わない、影薄い空気野郎は黙って隅っこにいろに限る。

触らぬ野郎に何とやらだ。

基本的に人を嫌うという事はない俺だが、コイツだけはどうしても好かない。

存在事態、見ただけで俺の全ての細胞が拒否る。

ある意味凄いな、目が合った瞬間全員鳥肌たつのは、人生で最初で最後、あいつだけだろう。

顔はまあまあ良いのに、気持ち悪い。

話し掛けるなんて無理、吐くよ。

：さてと、遠回りして帰るか。

今日は新しい料理を作るんだ。

こんな野郎に構っている暇はない。

コイツに時間を割くほど俺は寛大ではないのだ。

それに、ウォーキングは体に良いし、運動は嫌いではない。

回れ右をして非常階段の方に向かって歩く。

俺が嫌うあいつは仕事場の通路で時間を気にしていて、時々携帯電話についている鏡で自分の黒くて短い髪をちょいちょい弄ったり、髭の形を手で触ってみたりと容姿に忙しいからか俺の存在には気づいていないようだ。

会社にはもう俺くらいしかいないのに、ナルシストめ。
やるならトイレでやってこい。

あー良かった良かった、影が薄くて本当に良かった。
親に感謝せねばならないな。

今日作った物が上手くいったら仕送りに交ぜるか。
母さん、父さん、姉さん夫婦よ、楽しみにしていてくれ。

黙々と非常階段を下りていると警備員さんと遭遇。
お互い小さく会釈をし、警備員さんが、

「まだ誰かいました？」

と聞くので俺は頷いて、
「7Fに男性が一人いました。待ち合わせをしているみたいでしたよ。」

通路の邪魔だったので私は非常階段で下りる羽目になりましたよ。」
と上を指差し、大袈裟に肩を竦めて答える。

此処の警備員さん、原口さんとは残業の時にこの非常階段でよく顔を合わせるので顔なじみだ。

俺が残業の日にたまにこうやって立ち話をするくらいの関係。

名前は名札で知った。

原口さんもたまに名前前で呼んでくれる。

私の名前も今首に掛けている名札で知ったのだろう。

原口さんは仕事場の人より親しみを持ってるので、名前で呼ばれるのは内心嬉しい。

しかし、相手は夜間巡回なのか昼間には見かけた事がない。
そこが残念だ。

歳が近そうなのであわよくば仲良くなりたいのに。

俺が教えると原口さんは帽子の鍔をクイツと持ち上げ、

「ありがとうございます。」

あ、そうだ。外は冷えますので、飯塚さんにカイロあげますよ。俺間違って二個持ってきちゃったから気にしないで下さい。」

柔らかい笑みを向けられ、キュン、ってなっていると、彼のポケットからカイロを渡された。

好青年っぽい見た目通りの優しさとドジさ。

優しいなあ：今度頑張ってメアド教えてもらおう。

それから自慢の料理の試食してもらいたいなあ。

細いわりに意外に沢山食べそうなイメージあるし。

もっと仲良くなりたいという気持ちが強まる。

「ありがとう原口君。」

そうだ、お礼にチョコレートあげるよ。昨日美味しく出来たんだ。」

カイロを両手で受け取り、じーんと胸が温まり、暫く感動している。ナチュラルに“原口君”呼びに成功に心の中でガッツポーズ。

俺は慌てて鞆から小さなタッパーを取り出して彼に渡す。

もうすぐバレンタインデーなので、家族に贈る試作品を昨日作って、今日仕事の合間に味見する為に持って来たのだ。

今年も成功したので満足した俺だが、間食はあまりしないので少し余ってしまったのだ。

家に持って帰って、違う形に変えて食べても良いが、カイロのお礼としてあげられる物が他に持ち合わせていない。

ドキドキしながらタッパーを原口君に差し出す。

今の流れは不自然じゃない、でももし甘い物苦手だったらどうしよう…

原口君に嫌われちゃうかなあ…

それは嫌だなあ。

スッ。

手の中の物が無くなる。

顔を上げると、原口君はまた優しい笑顔で俺を見ていた。

「ありがとうございます。後でいただきますね。」

「う、うん。そんなたいした物じゃないけど：お口に合えば幸いです。」

「アハハ、謙遜しすぎですよ。」

それじゃ、仕事に行きます。おやすみなさい。」

「お仕事頑張ってね。」

おやすみなさい原口君。」

お互い会った時のように頭を下げ、そこで別れた。

今日は良い日だ、このままいけば料理上手くいくかも。

足音軽く階段を下りて行く私。

チラッと振り向いた原口君がクスッと笑って、

「飯塚さん、可愛い人だなあ。」

タッパーを懷にしまい、早足で非常階段を上って行った。

――ヒュウウー。

温かいけどくらいビルを出て、夜風が冷たい眩しい街に出る。

原口君が言った通り、今晚は昨日より寒い。

コートにマフラーを着けているが、カイロを持つ素手がかじかむ。

今日に限って手袋を忘れてしまった馬鹿な俺。

だが、カイロが貰える代償としては激安だ。

冷風によって温かかったカイロは次第に冷たくなる。

仕方ないので温もりが消えないうちにポケットにしまい、両手を擦り合わせながら駅へと向かう。

ハイヒール特有のコツコツという音が人気の少ない道に響く。
都会は廃棄ガスが酷いので、ちよつとでも自然がある場所を歩くようにしている。

自然は目の保養になるし、植物がある場所は空気が浄化されてる（気がする）。

花は可愛いしね。

ホームレスがいるのが残念だけど。

さっさと電車に乗って帰ろう。

最近不審者が続出するって言われてるし、注意して損はない。

早足で鞆を握りしめ、顔を真っ直ぐ前に上げて歩く。

こういう時はびくびくしている様子を見せずに、強気に振る舞うのが善作だ。

恐くない恐くない恐くない。

どんどん駅が近くなる、安心からか足が早まる。

人も少ないが増えてきた。

後ちよつとで改札口に着くというその時、

ドンッ！

「きゃっ！」

「あゝん？　いつてえなあお嬢ちゃん。周り見てまちゆかあゝ？」

「えゝ？　課長にぶつかったのおゝ？　それはいけませんねえ！」

「ご、ごめんなさい。」

慌ててぶつかった相手に謝る。

…まずい、こいつら酔っ払いだ。

しかも質が悪いタイプ。

周りを見て見ぬフリして俺達の周りを通り過ぎる。

ハゲとデブが頭にネクタイ巻いて片手に土産を持つ、漫画やドラマとかによくある迷惑な二人組。

しかも酒臭くて鼻がひん曲がりそうだ。

何か意味不明な言葉を口にしながら顔を近づけてくるので、スツと立ち上がって駅に向かった。

「お姉ちゃん何処に行くのかなあ？」

「まだお話は終わってまちなんよ？」

「「アッハッハッハッハ！」」

：しかし、ガシッと油っぽい手の平で腕を捕まれ引き止められる。赤ちゃん言葉で喋られ睡が飛び、何故か笑われた。

意味わかんない、気持ち悪い、逃げたい。

しかし先程と比べ人はほとんどいなく、俺達だけだ。

駅員は死角なのか気づいていない。

声に出して助けを呼べば良いが、喉が詰まって音にならない。

オッサン達がなめ回すように俺の体に視線を這わせる。

それだけで鳥肌がたつ。

腕を握ってた手の動きが怪しくなる。

本当にやばい：涙が出そうだ。

カタカタと寒さと恐怖で体を震わせていると、腕を撫でているオッサンに気づかれた。

「あんれえー？震えちゃって、寒いのかい？」

「おじさん達がベッドで温めてあげよつかー？」

「い、嫌：もう、離して下さい。」

「んん？聞こえないなー？住田君聞こえたかい？」

「いいえ課長、私にも聞こえませんでしたあ。」

絶対聞こえてんだろクソ親父共。

しかしチキンなので口には出せない。

むやみに暴言を吐いて自分が被害に遭うのは馬鹿がする事だ。

俺はそこまでプライド高くないし、何言われても大体は耐えられる。

我慢すれば良いのだが……これは生理的に無理。

腰を撫でる手が気色悪くて、声を振り絞って叫ぼうとすると、

「すみません。」

「はぁーん？」

横から声が聞こえ、誰かがオッサンと私の間に割って入る。

そのおかげでエロ魔人の魔の手から逃れられた。

ハイヒールの上を革靴で踏まれ痛かったが、今は許してやろう。

男から二、三步後退して痛む足の甲を手でさする。

俺が見てない所で男はオッサン×2をキツく睨み、低い声で威圧する。

「何あいつに汚れた手で馴れ馴れしく触ってんだよ糞野郎共が。あ
っ？」

「な、なんだよ！あの嬢ちゃんが先にぶつかってきたんだぞ？」

「そうだそうだ！」

男性にビクビク怯えながらも頑張って抗議する醜いオッサン達。

あ、もうすぐ最終電車来ちゃう。

急がないと。

触られた箇所を服についた汚れのように手で払い落とし、そそくさと駅へ走る。

男性には悪いけど、また今度会った時にお礼させてもらいます。

振り返らないで駅に一直線。

スピードはハイヒールだからあまり早くはないが、数をこなして走り込む。

俺がいなくなった事にオッサンの一人が気づいたようだが、その時にはもう駅の中。

入るには切符が必要だ、ざまあみろ。

入った時にはまだ電車は着いてなくて、けど危機から逃れた事にはホッとして。

ベンチの一番端に腰掛けて

「ハァー」

と息をつく。

吉日かと浮かれていたら厄日のような事が起こるし。

最高級とも言える嬉しい事の後に地獄とも言える最悪な事があるって、何か裏切られた気分。

後味悪いし、良い気分のままいさせてくれればいいのに。

「あ、そういえば。」

閉じていた目をパツと開け、重要な事を思い出す。

さっきの男性の顔を見るのを忘れてしまった。

これじゃあ誰にお礼を言えば良いのかわからないじゃないか。

俺とした事が……あー最悪。

覚えてるのは男性のコートの色と俺より遥かに高い背丈。

確か黒髪だった。

後は、足を革靴で踏まれた事くらいかな。

あの人も会社帰りっぽかったな。

ドサツ、と背もたれに背を預け、

「ま、相手が覚えてるだろうし、問題ないか。」

「問題大アリだ。」

「……。」

あ、鳥肌発生。

聞き覚えがあるような、聞こえる度に脳が自動で削除してくれているような、思わずマフラーで顔半分と両手で耳を塞いだ。

無意識の拒絶反応。

凄いね、こんなになるまでコイツ嫌いだったんだ。

目だけ電車が来るのを注意する。

電車よ早く来い早く来い早く来い早く来い早く来い。

「…ハア。そんなに嫌いかよ。」

チラッと俺を盗み見て溜息なんかつきやがった。

何か言っていたみたいだけど、両手で塞いでいるから聞こえない。

ふん、つくづくムカつく野郎だ。

早く朽ちろ。

俺に背を向けたまま前に立つ男は、さっきのコートの男と同じコートの同じ髪に同じ背中。

……うわ、最悪。

コイツに助けられるとか泣ける。

末代までの恥だ。

ごめんよ、父さん、母さん、姉さん、家にいるダルメシアンのモノクロと三毛猫の母様（本当に母様って名前）、義兄さんと生まれたばかりの姪よ、俺のせいで泥を被らせてしまった。

そろそろ実家に顔出します。

「おい、乗るぞ。」

目を閉じて身内全員に謝罪していると、腕を引っ張られた。

そのまま最終電車に乗るのだが、二の腕を捕む素手をチョップで外し、

「痛っ!？」

と驚くあいつを余所に、俺はスタスタと離れた席に座る。

あいつが睨んできたが無視だ。

あんな奴俺の知り合いじゃない。

ただの通行人Gだ。

そんなもんで充分。

しかし、あいつが後ろ頭をガリガリ掻きむしりながら俺の方に歩いてきた。

そして、人が少ない電車だというのに私の前の吊り革に捕まる。

プルルルル…

電車の扉が閉まる。

コイツに見下ろされて鳥肌や寒気が半端ない。

腰を浮かせて座席の端に移る。

するとまた睨まれた。

止めてくれ、お前に睨まれると嫌な予感しかない。

あいつは席に腰掛け、私とあいつの間に人一人分くらいのスペースだけになる。

私は端にいたのでこれ以上動けない。

いかん、はめられた。

コイツの間に鞆置いて間を空ければ良いが、盗まれる可能性がある。それは避けたい。

……そうだ！

通行人Gだと思って喋れば良いんだ！

声は雑音だと思えば問題ない。

きつと大丈夫さ、コイツはG、黒いG。

「あの、近いんですが。他にも空いてる席が沢山あるんですけど。絶対目は合わせない。

鞆で顔を隠す。

鳥肌視線を回避する為だ。

すると、ズイツと無いに等しい間を更に詰められ、完璧に無くされた。

…何コイツ、

「セクハラされましたー！」

って叫んでやろうか。

やばい、女性の目に殺意が込められている。

俺なにもしてないのに。

よし、お礼言ったら席を移ろう。それか立っていよう。

「さっきは助けていただき、どうもありがとうございました。今度お礼の品を納品します。それで勘弁して下さい。」

「納品って、お前ね。」

それより、何で先に帰ったんだよ。せっかく入り口で待ってたのによ。」

肺の深い所から溜息を吐き出すアイツ。

煙草の独特の臭いが鼻を掠め、手で覆う。

俺は煙草は嫌いだ。

悪い物を詰め込んだ物にどうして金を払ってまで吸わねばならないのか。

理解しかねる。

このまま癌になって死ねば良い。

そうすれば俺の平和は保たれる。

しかし、“待っていた”とは語弊がある言い方だ。

どうせそこらへんの女性社員をお持ち帰りする為に待っていたんだろうが。

ああ、汚らわしい。

何ならいっそ子作りに勤しんで、少子化社会に貢献しろ。

会社辞めちまえ。

「何故私を待つ必要があるのですか。残業の度に通路塞がれて、こちらは迷惑してますよ。」

そのおかげで原口君に会えてるのは秘密だ。

感謝は微塵もしていない。

すると相手は勢いよく立ち上がり、

「んあの飯塚を待ってたに決まってるだろうが！なのに毎回毎回黙って帰りやがって！！ふざけんな！！また今日みたいな事があったらどうするんだよ！？女のお前じゃ太刀打ちできないだろうが！！たまたま俺が通りかかったから良かったものを、もし俺がいなかったらどうしてたんだよ！！？」

「そういう事が迷惑なんです。同期に入ったよしみだからって私に関わらないで下さい。貴方に何かされると被害に遭うんです。何なんでしょうか、一体。貴方は被害に一度も合った事ないのに、逆キレないで下さい。」

それに、これからスタンガン持ち歩く予定ですから心配なさらないで下さい。

後、私がいらない間に私のカップを使ってコーヒーを入れてテーブルに置かないで下さい。貴方のせいで大事な書類を汚されましたからおかげで今日は早くあがれる筈が残業ですよ。」

何故か怒る同僚磯村に俺は冷静に返す。

そう、今日はコイツが何故かはわからないけど、俺が会議で席を離れた時にコーヒーをテーブルに置いて、コイツを狙ってる女性社員達にコーヒーを倒され、大切な書類を汚されてしまったのだ。

戻って来た時にはその場に立ち尽くしてしまった。

しかも上司に

「こんな所にコーヒーを置いておくお前が悪い！」

と散々叱られた。

否定しても意味が無い事は三年もされ続ければ当然わかる事で、深々と頭を下げて

「すみませんでした。」

と素直に濡れ衣を被るのが一番平和な方法。

上司との関係も悪くならないで済む。

大人とは後々の関係の事も考えて動かないとならない。

窮屈な社会でせつせこせつせこ働くロボットのようなただの物だ。

要らなくなったら簡単に棄てられ、新しい物を導入する。

その繰り返し。

嫌な世の中だが、生きる為には必死に会社に結果を出さなくては代価はいただけない。

今日も俺はロボットのよう働いた：

もうそれで良いじゃないか。

「次は××ー××ー。」

電車のアナウンスが聞こえる。

俺の言葉の後からお互い何も話さない。

俺は鞆を肩に掛けて立ち上がり、アイツの前を擦り抜けて入り口の前に立つ。

アイツはマネキンのように動かない。

ただ、驚愕の顔で電車に倒されないよう手摺りに捕まっているだけ。何も知らなかったようだ。

そりゃそうだ。

アイツがいない時を見計らって、女性社員達は仕掛けているのだから。

俺が何も反抗しない事を良い事に、嫌がらせは回を増す事にエスカレートしている。

そのうち体に被害が出るようになったら訴えよう。

ガタンガタン…ガタンガタン…

体を扉に預け、揺れに身を任せながらそう呑気な事を考える。

我慢する事は慣れている。

忍耐強い事が唯一の長所だと断言できるほどに。

ガタンカタンカタン…プシュウウウ…

電車の速度がだんだん遅くなり、もたれ掛かっていた扉が開いた。俺はアイツに振り返る事なく、人がいないホームを早足で歩き去った。

——ガチャ。

「ただいま、ん？」

帰宅したのは深夜零時を過ぎた頃。

マンションの4Fの一室に入ると、玄関に俺のじゃない靴と玄関で体育座りしている学ランを着た中学生。
中学生には思えないオレンジ色の頭をしている。

この子は姉の旦那さんの弟、慎君。
見た目通り(?)中学生。

反抗期真っ盛りの慎君は当然親との仲も悪く、髪を染め、制服を着崩し、学校をよくサボり、街をフラフラして、喧嘩をしよっちゅうしては所々に傷を作り、何かあると中学校から近い俺のマンションに逃げ込むのだ。

出会いは結婚前の家族合わせの時。

後日義兄さんの家に家族で行った時、居心地が悪そうにしていた慎君に家を教えたのがきっかけ。

以前まで俺の仕事が終わり帰宅するまで部屋の前で待っていた事が何度もあり、今では合い鍵を渡している。

近所の住民に変な噂を起てられるのを阻止する為でもあるが、放っておけないという気持ちが強い。

「慎君、慎君。ただいま、帰って来たよ。」

「ん：ああ、おかえり。」

今日はやけに遅かったな。また残業か。」

クア：と大きな欠伸を漏らして俺を見上げる慎君。

まだ年相応に幼い顔立ちで、怪我の痕が無ければ可愛い顔をしているのに。

肌も俺より綺麗で、正直羨ましい。

「うん、遅くなってごめんね。今ご飯作るから。」

「ん。晩御飯何？」

「パエリア。しかも最初から手作り。」

「うわ、超時間かかるじゃん。」

「というのは嘘で、明日休みだからパエリアはお昼ご飯に作るよ。」

今日は簡単に親子丼。」

「そりゃ楽しみだ。」

慎君を手を引っ張って立ち上がらせ、床暖房を入れてから部屋に行
って着替える。

エプロンを着て台所で調理していると、後ろから慎君が現れ、覗き
込む。

チラッと俺を盗み見る彼に俺は

「ん？どうした？」

と聞く。

後は煮込んで丼に入ったご飯の上に乗せるだけだから、慎君の方に
向いて小さく首を傾げる。

慎君はばつが悪そうに目を斜め下に下ろし、ちょっとだけ背が高い
俺を見上げる。

グッと眉間に皺を寄せ、

「冬樹さん、今日何かあったろ。」

と単刀直入に切り出した。

あ、因みに冬樹とは俺の名前。

女なのに男っぽい、とからかわれた思い出は多数。

俺は慎君の予想外の質問に不意を食らい、思わず

「へ？」

と間拔けな声を出してしまった。

目の前の中学生は真剣そのものの表情。

一方俺は眉間に寄った皺を見て、

「将来苦労するぞー」

と思っではいたが口にはしなかった。

だって、慎君の顔がちょっと恐い。

俺のチキンハートが四、五歩後退したがってる。

が、そんな事したら彼が傷つくのは目に見えているのでできない。

俺は一旦火を止め、腕組みして考える。

「まあ、確かに嫌な事はあったな。」

今日早く上がれる筈がGのせいで残業になったし、帰り道に酔っ払いに絡まれて、しかも助けてくれたのがGだし、しかもGに電車の中で逆ギレされたし、パエリア作れなかったし。」

「：Gと酔っ払いぶっ殺してくる。」

「止めて。もう何処にいるかわからないし、顔知らないし、慎君も暴力を振るって少年院行きになるのは嫌でしょ？それでも行くなら合意鍵返して。」

「うっ。」

部屋を飛び出して酔っ払い全とサラリーマン男性を血祭りを上げに行きそうな慎君の腕を掴んで、力では敵わないので最後に攻撃力が一番強い言葉を投げ掛ける。

すると案の定殺人オーラがしゅるしゅると消えていき、最終的にその場で体育座りをして小さくなる反抗期真っ盛りの中学生。

その頭をワシワシと撫で回し、

「ありがとう。けど、今日『関わらないで』って言っただけだから安心して。それと、明日スタンガン買いに行くから夜道も大丈夫。」

「：俺が心配なんかするか。ただ、ムカついたから殴りに行こうとしただけだ。自惚れるな、バーカ。ふん。」

弱々しい虚勢とオレンジの隙間から見える真っ赤な耳。

顔はもっと赤いのだろう。

想像してクスッと小さく笑った。

俺の笑い声が聞こえたのか、慎君は学ランを頭に被って更に縮こまってしまった。

――次の日。

早朝の誰もいない会社に入り、アイツのテーブルに昨日の謝礼のヒ

ヨコ饅頭を置いて、そそくさとビルを出る。

：よし、任務完了。

後は家に帰ってもう一眠りしてからパエリアを作ろう。

慎君と一緒に食べて、それから電気屋でスタンガン購入。

後は二人でぶらぶらするか。

仕事は会社で終わらせたからゆっくりにできる。

「ふぁ…眠たい。」

手で口を隠してから欠伸を零し、目を擦りながら歩く。

「「あ。」」

「あ！」

目を合わせる前に、回れ右をしてブーツの音を置き残し走って逃げた。

第二步

今日もまた夜勤で、帰宅したのは深夜2時。

原因は、突然上司に渡された山積みの資料の作成。

泣けるね。

こりゃ簡単に終われないな、と悟ったのは0時を回った頃。

やっと三分の二を終えた辺り。

慎君に連絡して、晩御飯はカップラーメンで済ましてもらった。

申し訳ない。

私はコンビニのおにぎりと缶コーヒーで終了。

やっと仕事を終え、会社から自宅までタクシーで帰り、フラフラしながら帰宅。

さっき2時を過ぎた。

軽くシャワーを浴びて、さっさと眠ろう。

近所迷惑にならないよう静かに玄関を開ける。

すると、誰かの寝息が聞こえる。

扉を開けた先には、

「スウー…スウー…」

何故かパジャマ姿の慎君が寝ていた。

血が流れていたら事件現場の完成。

じゃなくて。

またか、慎君。

合鍵を渡している慎君に空き部屋の一つを渡している。

殆ど仕事ばかりの俺。

このマンションには寝泊まりと食事にか使っていない。

逃げ場として居着いている慎君に寝場所がないと不便、だと思い始めたのはそんなに遅くなかった。

まさか泊まると思ってなかったし。
ソファで寝かせるのは窮屈そうだし。
で、部屋を指定。

部屋のドアノブ部分に「しんくん」というプレートを（勝手に）ぶら下げた部屋に、元客人用の簡易ベッドがある。

元々客室に使うとしていた部屋なので、俺の部屋以外にベッドがあるのだ。

プレートを付けたのは、何となく。

この前スタンガン購入した日に偶々よさそうなのを見つけたので、使ってみただけ。

部屋の主が文句をブチブチ言っていたが、外さないという事は何気に気に入っているらしい。

元客室は、今、慎君の私物で溢れかえっている。

もし客人が泊まりに来た場合、俺の部屋を使ってもらおうと考えている。

物少ないし。

綺麗な方だし。

俺はソファで構わないし。

…慎君に甘いかな？

子供は可愛いから仕方ない。

おーい、起きろー。

眠る彼をユサユサと揺さぶる。

俺も疲れているから早く寝たい。

頼む、起きてちょーだい。

「慎君、慎君、そんな所で寝てると風邪ひくよ。ベッドで眠りな？」

「あゝ…また遅かったな、冬樹さん。座ってたのに、いつの間にか寝ちゃった。」

「ありがとう。でも、本当に待っててくれなくていいよ。慎君が病気になるったら心配だから。」

「んー、考えとく。」

ゴロンと寝返りをうち、生返事だけ返す慎君。
このまま放っておくと寝てしまいそうだ。

ベッドで寝てくれ。

お馴染みとなった行動をする為に両手を彼に向けて差し出す。

それを軽く握る慎君を引っ張り、重たい腰を上げさせる。

これが以外と体力がいる。

見た感じ簡単そうだけど。

うっ、もうちょい積極的に立ち上がってくれ。

腰が、背中が。

デスクワークばかりしている俺にはキツイ。

もうおばさんなんだから。

若い君がしつかりしてくれ。

「はい、おやすみー。」

千鳥足の慎君の背中を押し、部屋に入るまで見送る。

扉を開けた時にコチラに手を振るこの行為は、慎君のおやすみの挨拶。

俺が小さく振り返すと、部屋に吸い込まれるように消えた。

パタンと閉まった扉を確認した後、大きな欠伸が漏れる。

ちゃっちゃとシャワーを浴びて、薄化粧も一緒に流す。

そっから記憶はない。

泥のように眠ったような気がする。

仮眠を数時間貪ると、もう朝。

時間とは無情だ。

あまり眠れなかった気がする。

リビングで一人、朝ごはんを黙々と食べる。

鳥の鳴き声さえ聞こえない食卓。

時計の秒針がチツチツと一定の音をたてる。

普段気にならないけど、今はちよつと煩い。
それくらい静かな朝の5時30分。

カチャ。

目の前の扉が開いた。

リビングに繋がるのは二部屋だけ。

俺の部屋から幽霊や不審者とかいうホラーじゃない。
唯一名前付きプレートがかかってる部屋からの登場。
あら、珍しくお早い起床で。

とても眠そう。

オレンジ頭が寝癖でピョンピョンはねとる。

セットしてない髪はボサボサ。

モリ／ゾーのオレンジバージョンみたい。

眠たそうに目を擦りながら前に座る慎君。

「んゝ…」

ゴン。

ありゃ、テーブルに突っ伏してしまった。

彼の分の朝食に髪が。

腰を浮かせて、皿の上から除けてやる。

一応ラップしてあるけど。

パジャマ姿の彼は年相応に見える。

ただの中学生だ。

男の子にしては長い髪がテーブルに一面に散らばる。

あー、髪の毛痛んでるよ。

ワックスとか髪染めとか使うから痛むのに。

けど、根元はしっかりしてる。

その若いエネルギーが羨ましい。

三十路手前の私にとって、中学生は生きるエネルギーだ。
何にもしてないのに毛先が痛んでるし。

再生遅いし。

白髪増えそう。

シワやシミも増える一方。

体重しか痩せない。

：老けたなあ、俺も。

「お粗末様でした。」

「ヤバ、寝てた。」

「今日土曜日だからゆっくり寝なよ。深夜にあんな寒くて痛い場所
で寝てたんだから。」

「すみません。」

顔だけ起こす慎君の頭がモサツと揺れ、ペコリと頭を下げる。

草むらが揺れたみたいな感じだった。

俺のペツタリしているのとは違って、草むらみたいに量がある。

草むらは言い過ぎか。

ごめんね慎君。

でも、いいなー。

わけてくれないかな、とか思っちゃう。

でも、前髪が目に入って痛そう。

ヘアピンしないのかな？

視力が落ちると大変だからね。

さてと、洗い物してから仕事に行こうかな。

慎君は自分でやってくれるから、俺のだけやれば良くて助かる。

洗濯もやってくれるし。

有り難い、有り難い。

もう時間かな。

会社に向かいますか。

「…ねえ、冬樹さん。」

「どした？」

玄関で忘れ物を確認していると、見送りに来てくれた彼が物言いたげに頬をポリポリ。

髪をガリガリ。

視線がキョロキョロ。

片手で口を覆う。

無自覚だろうけど、彼がよくやる癖だ。

大切な事を言いたい時にする、ちょっとしたサイン。

こういう時は俺から話を振ってやるのが一番。

スムーズに進むから。

ハイヒールを履き、彼を見上げる。

「聞いてあげるから、話してみて。」

「…あのさ、」

「うん。」

「……………今月の二十三日、空いてる？」

「三月二十三日？」

仕事は勿論入ってる。

二十三日？

何かあったっけ…。

学校の予定表とか知らないし。

てか、慎君学校に行ってないから持ってないか。
うーん。

中学生で、二十三日。

三月、三年生で…あ。

卒業式か。

中学校最後の行事。

そうか、卒業シーズンか。

ちゃんと出席するとか、可愛いなあ。

あまり良い思い出があるようには思えないけど。
最後くらいはキチンとしたいのね。

確か有給がまだある。
会議もなかったはず。
行けるか。

上司が何か言わない限り。
もし遅れたとしても、行ってあげよう。

腕時計を確認する。

電車の始発には間に合う。

「何時から？」

「多分9時から。」

気まずそうに呟く慎君。

断ったら俺が出てった後に落ち込みそうだ。
腰に手を当て、わざと大きい溜め息を吐く。

「しゃーない、有給休暇を使ってあげますか。ちゃんとカッコイイ
姿を見せてよね〜！」

髪の毛をワシヤワシヤと両手でかいぐり回し、更にボサボサにさせる。
る。

ワオ、モンスター誕生。

顔くらいはハッキリさせてあげよう。

ちよいちよいと左右に分ける。

あ、顔赤い。

これは照れてるな。

嬉しいのか、そうかそうか。

パジャマをそんなしわくちやにさせるくらい喜んでるのね。
よしよし。

その可愛さに免じて、耳の熱は見なかった事にしてあげよう。
若いっていいね。

ポン、と頭に手を乗せるだけ。

「行ってきます。」

「…………っしゃい。」

上手く聞き取れなかったが、慎君にニコツと笑ってみせた。

立ってるのがやっとの彼に背を向け、部屋を出た。

歩きながら思う。

不良が何だってんだ。

学生の間くらい、自由にやらせてやろうではないか。

大人と違って、彼らは必死に今を生きているんだ。

大人が子供の未来を奪う権利はない。

子供が未来を創るんだ。

慎君は、私のようになってはいけない。

つまらない人間になったら、未来が閉ざされてしまう。

のびのびすると良いよ。

暫くあの部屋は、君の居場所だ。

………てか、高校どうすんの？

帰ったらちゃんと聞かなくちゃ。

高校くらい卒業しないと。

もっと未来が狭まってしまうよ。

「よしわかった。でも、今ある仕事は終わらせろ。」

「ありがとうございます。」

うし、有給休暇獲得。

喜べ慎君よ。

卒業式の日はずっと一緒だ。

のんびりできるぞ。

顔には出さないが、俺は至極嬉しい。

無表情の鉄仮面だが、内心万々歳状態。

深々と頭を下げてからデスクに戻る。

気を抜いたら鼻歌を歌いそうだ。

隣の席の磯村が全く気にならない。

今日はきつといい日になるぞ。

天気も良いし。

そういや、慎君の学校が卒業式なら、もうすぐ新入社員が入るのか。私に部下はいないけど、今年も部下が出来ないと嬉しい。

他人と関わるのはぶっちゃけ面倒臭い。

面倒見るなら尚更。

嫌だなー、タルいなー。

勝手にやれって思う。

ま、なるようになるか。

今はこの仕事を終わらす事に集中集中。

ーっと、もう昼休みか。

ん、疲れた。

お弁当食べたらもう一頑張りしますか。

おっ弁当ーおっ弁当ーのー時間ですー。

今日は公園で食べよっかな。

「おい、飯塚。」

「...」

わあ凄い。

鳥肌100%。

違った、鳥肌120%。

思わず腕捲りして確認したし。

気持ち悪っ。

ダッ！

パシッと両手で耳を塞いで、駆け足。

その場から逃げようと試みる。

いや、逃げる。

ツクソ、最近何もしないから油断してた。

不意打ちとか卑怯。

アイツはやはり最低だ。

一生好きになれそうにない。

ひよこ饅頭を納品したのにまだ足りないのか。

キムチ一樽だったら満足するのか。

一体俺に何をしろってんだ。

「ちょっと待ってっ！」

ガシッ。

手首、掴まれた。

両方共、身動きとれない。

ダイレクトに感じる体温。

アイツのデカイ手。

無駄にデカイ背丈。

香水の臭い。

髪にかかる息。

気持ち悪い。

気持ち悪い気持ち悪い。

気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い！

「離して下さい。セクハラで訴えますよ。」

「お前が逃げるからだろうが。ちょっとアレのやり方教えてもらおうとしただけだ。」

「そんな他の人に頼んで下さい。私はお昼休みに行くんです。貴方なら誰でも親切に教えて下さるでしょうが。」

「俺はお前に頼んでるんだよ！てか、他に誰もいねえし！」

確かにオフィスには俺と奴しかいない。

それが何だ。

関係ねえ。

煩いんだよ。

人の頭上で怒鳴るな。

背中にいるな。

手を離せ。

うっとうしい。

お前がわからないとか知るか。

俺は全て本で学んだ。

人に頼れないからそうするしかなかった。

注意された箇所を何度も復習した。

お前も本で調べるくらいしろ。

すぐ人に頼るな。

俺に話しかけるな。

お前が嫌いなんだ。

お前がこれほど嫌なんだ。

こんなにも拒絶してるんだよ。

だから離せよ。

「貴方に恩はありますが、ひよこ饅頭では納まりきらないのですか？」

「見返りを求めてやった訳じゃねえよ。」

お前さ、何？俺、飯塚に嫌われるような事したか？」

「：何を今更。」「は？」

馬鹿だ。

正真正銘の大馬鹿野郎だ。

だって、こんな事をぬかしやがったんだ。

お前の存在自体、死ぬほど嫌いだ。

理由はそれだけ。

他にありすぎて言い切れない。

お前なんかいらぬ。

バツ！

渾身の力で振り切った。

最初からこうすればよかった。

もう弁当はデスクで食べよう。

外で食べる時間はない。

グシャリと前髪を掴む。

アイツに顔を見られないように。

もう疲れた。

切りをつけよう。

アイツは立ち尽くしてる。

手持ちぶさたなてを頭にやり、煙草臭い溜め息を吐く。

浅く深呼吸をする。

落ち着いたと思った時、顔を上げた。

真顔で告げる。

奴の顔は決して見ない。

「お願いですから、私に関わらないでください。貴方がいると、悪い事しかない。」

「…だから人がいない時に話し掛けた。」

「どんな時でも変わらないです。」

私は、磯村さんが嫌いです。貴方も私が嫌いでしょう。もう、それでいいじゃないですか。」

「……。」

お互い無言。

無駄な時間だ。

顔を俯かせたまま横を通り過ぎる。

早くご飯食べないと。

午後を乗りきれない。

「なら、俺にもチャンスあるか。」

廊下に一人、警備員姿の原口が壁に凭れかかっていた。

片手には冬樹が渡したタッパ。

ちゃんと洗ってある。

ポケットから一枚の紙を取り出すと、タッパーの中に入れた。紙にはメールアドレスと電話番号とフルネーム。

「反応が楽しみだ。」

ニツと口に笑みを浮かべ、タッパーを懷にしまった。

静寂が満ちるオフィスに背を向け、軽い足取りでその場を後にした。

夜、人気の少ないオフィス。

隣の席に磯村がまだいる。

普段さっさと切り上げて帰るのに。

早くいなくなってくれよ。

一人の方が集中できる。

「お前らあんま気を詰めるなよ。倒れたら元も子もないからな。じゃ、お先にな。」

「お疲れさまでした。」

「おやすみなさい。」

前の席の先輩に軽く頭を下げる。

あの先輩は誰に対しても平等だ。

自分を持っている。

隣の奴の上司だけど。

あの人は普通に好きだな。

だんだん人が減っていく。

後、俺と野郎を含め三人。

向こうに一人、去年の新入社員が仕事をしている。

もうすぐ0時だ。

残りは持ち帰ろうかな。

あ、メール着てた。

義弟の慎君からじゃない。

仕事中にするなんて珍しい。

どれどれ。

「今、会社の前。終わったら電話して。」

……………今？

それは21時のことかな？

今、0時。

……………は……？

三時間も外で待ってたのあの子！？

いくら春でも夜中は寒いぞ！

ちょ、今すぐキリの良いところまで終わらせなきゃ。

猛スピードでキーボードを打つ。

カタカタカタカタ！

早く、正確に、急げ急げ。

っし、一旦これで終わり。

帰る支度をしながら肩と耳でケータイを挟む。

忘れ物、なし。

全部持った。

完璧か。

プッ。

タイミング良く慎君が電話に出た。

「もしもし、慎君？ごめんね。気づくのが遅くなっちゃった。

今出るから、温かい物食べて帰ろ。」

「冬樹さん遅い。罰として、ラーメン奢って。チャーシュー追加ね。」

「アハハ。うん、慎君が満足するまで食べて。

…あ。」

「……………」

「どうした？」

驚愕の眼差し。

向こうの新入社員も俺の方を振り返っている。

アイツも信じられないといった表情で見上げてる。

会社で笑ってしまった。

いや、悪い事じゃないけど。

鉄仮面の笑い声。

親しげに話す電話相手。

しかも男の子。

女性社員がいたらビックニュースだ。

……さ、行きますか。

踵を返し、オフィスを去る。

早足なのは仕方ない。

「何でもない。今行くよ。」

「早めに頼む。」

「はい。」

プツ。

コートのポケットにケータイをしまう。

人気の少ない廊下を歩いてエレベーターの前に到着。

ボタンを押して待つ。

寒空の下で待つ慎君に温かい缶コーヒーを渡してあげよう。

ちよつとでも温かくさせるために。

お詫びの代わり。

怒ってないといいな。

向こうから現れた原口に気づかず、俺はエレベーターに乗り込んだ。

——ヒュウウ。

まだ冷たい風が頬を撫でる。

会社を出たが、目当ての彼が見つからない。
見つからない。

あんな目立つ髪をしてるのに。

えー、どこいったのよ。

せっかく買った缶コーヒー冷めちゃうじゃん。

電話しようかな。

呼べば出てくるかな？

ちよつと街の方へ歩いてみる。

「慎くーん。慎くーん。」

中々現れてくれない。

こんなコート着ても寒い。

ちゃんと厚着してきたかな慎君。

本当に風邪ひいたらどうしよう。

トン。

「冬樹さん、もう限界。寒すぎ。」

「あ、いた。」

オレンジ頭発見。

全身がカタカタ震えておられる。

マンションで待ってればよかったのに。

何かあったのかな？

手や腕がボロボロで傷だらけ。

服も所々破れて酷い状態。

抱き着いてるからわからないけど、可愛い顔は腫れてたりしてるの
かな。

勿体無い。

もうちょい大事にすればカッコイイのに。

家に帰ったら手当てしてあげよう。

骨とかは平気かな？

もし折れてたら病院か。

いや、その前にラーメン。

お互いお腹空いてるからな。

どこかにラーメン屋あったつけ。

腕を後ろに回して、オレンジ頭を乱雑に撫で付けた。

ガシガシと撫でるとわかる髪の毛の汚れや冷たさ。

あ、タンコブできとる。

これはデカイ。

痛そう。

コンビニに湿布売ってたかな？

帰りに寄るか。

「ラーメンチャーシュー特盛を食べに行きますか。」

「おう。美味しい店へ連れてってくれよ。」

「期待するなよー。」

「冬樹さん、そこは逆だろ！ハハッ！」

「何とかなるさ。不味かったら笑おう。」

腹に巻き付く腕の力が緩む。

笑い声を聞いて俺も笑顔になる。

小さく笑い合いながら二人歩いた。

通行人の大半が俺達の方を振り返る。

好奇の目。

その視線の先は引っ付き虫の慎君。

暴れた後だからしゃーない。

血も出てるらしいし。

けど、俺達は気にしない。

現に今、笑っている。

お店を探しながらのお喋り。

慎君の手には渡した缶コーヒー。

手は痛々しいけど、血は固まっている。

白血球お疲れ。

「慎君、このお店はどう？」

「じゃ、入るか。」

背中から離れた慎君の広い背中を押して、温かい店の中に入った。

第三步

春になり、この部署にも新入社員が加わった。

その内の一人が俺の後輩。

最近大きなプロジェクトを任されたので人手が欲しかったのは事実だが、新人がいると余計手間がかかる。

第一に効率が悪い。

第二にしょっちゅう間違える。

第三に言うことを聞き入れない。

この三大要素を兼ね備えたのが新人というものだ。毎年毎年先輩や同僚のを見てきたからわかる。

新人指導は面倒くさい。

でも、今年は少し違うようだ。

俺の下に就いた後輩は、だけど。

「飯塚先輩、チェックお願いします。」

「わかった。」

淡々とした声に名前を呼ばれ、椅子を動かして隣のパソコンを覗き込んだ。

新入社員が入った頃に俺は一大プロジェクトのリーダーを任された。とても大きなプロジェクトなので、新たなスペースを設けられ基本そこで作業をしている。

チームの人数は正直少ないっちゃ少ないけど、多くてもそれが使えなければ意味がない。

これでやっていくしかないだろう。

どうせ俺が最後に責任を負うのだから、自分が一番動けばいいのだ。だから殆ど自力で終わらせている。

カタタ、カタ。

何時もは同僚が使っている右隣には、今年入った後輩の中森君。俺と良い勝負が出来そうなほどの鉄仮面で、言動に無駄がない。エリートのようなだが、そういうのを鼻にかけない真面目な性格で、誰よりも勉強意識が高い。

同期の同僚が叱られている中、この子はミスもあまり無いし、怒られるようなことはしないから俺はまだ一度も怒鳴っていない。喉を痛めるのを覚悟していたから拍子抜けだ。

「すみません、これはどうすれば良いですか？」

「どこ？」

わからないところは先ずは参考書で調べて、どうしてもって時は遠慮なく俺に聞く。

プライドが高い子は無茶をして面倒くさい失敗をしてくれたりするが、彼のようにわからないトコは『わからない』と言ってくれたりする方が上司としては楽だったりする。

素直な子は本当に楽だと思う今日この頃。

俺のマンションに居候してる慎くんもある意味素直だから、余計な心配をしなくて済む。

帰ったら晩御飯は何を作ってあげようかな。

今頃喧嘩してるのかな。

忙しい中、慎くんのことを考えると少しだけ心が落ち着く。

本当はお義兄さんの弟だけど、実の弟のように可愛がっている。

やんちゃは程々にしてもらいたいけどね。

可愛い顔が台無しになっちゃうから。

お昼時、人が減るオフィスでパソコンとにらめっこしていると隣から声をかけられた。

近頃当たり前のようになった食事のお誘い。

「飯塚先輩、お昼ご飯と一緒にさせていただけませんか？」

「いいけど、ちょっとだけ待ってね。」

昼になると中森君はよく俺と一緒にお昼を食べようと誘ってくる。時々俺の方から誘うこともある。

仕事が終われそうにない時は断ってるけど、目処がつけば同行している。

最初は一人の方が慣れていたから断ってたけど：まあ、何だ、何十回も誘われて、最終的に押しに負けたんだ。

今じゃ一緒に食べるのが普通になるまで回数を重ねた。

食事中、彼は俺に仕事のことを質問して、仕事のやり方を吸収しようとしている。

そして、教えたことを活用させて同じことを二度言わせない彼の学習能力の高さに、ただ脱帽。

中森君を一言で表すなら野心家だ。

目標を決めて最後までやり遂げるまで妥協や甘えとかを切り捨てて仕事に取り組む。

この子を就けてくれた専務と上司に内心感謝。

頼んだことを手っ取り早く、毎回期限前には終わらせてくれるし。

話し方も聞き取りやすく説得力があり、正にエリート。

そんな優秀な彼も、

「この前捨て犬と捨て猫を拾ったんです。すると、動物好きの平也が案の定喜んで。」

家族の話になると、僅かだが表情が柔らくなる。

大切な人のことを語る人間の空気が鉄仮面と呼ばれる彼にとっても馴染んで、見守るように微笑むとこっちまでつられてしまう。

お昼のこの間だけ、彼はとても人間味がある。

愛想笑いとかすればモテルだろうに、勿体無い。

媚びを売らないのが良いところなんだろうけど、やっぱり宝の持ち腐れだと思ってしまう。

「そういえば、慎くんも高校生でしたね？テストの方はどうですか？」

「うん。勉強は苦手らしいけど、お友達に教えてもらってるから赤

点は何とか免れてるっぽい。」

慎くんの話は滅多に他言しないんだけど、この子なら話しても大丈夫だと思ったから、出会ってから同居するまでの経緯とか全て話した。

彼の弟の平次君も高校生らしく、よく学校のことで話が盛り上がる。共通の話題ができる彼という時間は、会社にいる間で一番楽しい。異性だとかは関係無しに、一人の人間として彼に好感を持てる。

「よし、完成。」

渡されたファイルを確認し終え、それを片手で抱き抱える。

誤字脱字とかが見当たらない書類は中森君に頼んだ物。

彼が優秀なおかげでストレスも少ない。

しかも、前に右隣にいたアイツを気にしなくて済む。

ずっとこのままでいいのに。

そう願うが、プロジェクトが終われば元の席に戻るんだろうな。

ハア、憂鬱。

…っし、切り替え切り替え。

これから会議だ。

プロジェクトは着実に進み、後はこの書類の内容を上の奴らにどうやってわからせるか。

俺の肩に全てがかかっている。

これがボツにされたら物凄く面倒くさいし、交渉や駆け引きには負けたくないので、絶対押し通してみせる。

厳しい上司から許可も得たし、きっと大丈夫。

あの人は仕事では信用している。

キィ。

席を立ち、横で作業をしている中森君の肩を書類でトンと軽く叩く。書類の一つを差し出して、

「君も会議に行くよ。私を見て、体験して、次に繋げなさい。」
「はい。わかりました。」

遅かれ早かれ、彼はきつと俺と同じトコに立つのだ。
ならば早い方が無難だろう。

腕時計で時間を確認しながら彼の準備を待つ。

まだ余裕があるな。

「すみません、何が必要ですか？」

「書類、筆記用具、メモ帳と目標。」

「今回の目標は何ですか？」

「この書類でおっさん達を言いくるめて納得させる。後、予算アツプしてくれたら嬉しい。」

じゃ、行くよ。」

「はい。」

チームに一言告げてから会議室に向かう。

高身長 of 彼が後ろをついて歩くと何かと人目を引く。

大半が女性社員の妬みや嫉妬、男性社員からの好奇の目。

慣れたは慣れたが、やっぱり気持ちいいモノではない。

ガン無視してくれた方がよっぽどいい。

普段から背筋を伸ばしているせいか、まるで規律が歩いているかの
ように彼の生真面目さを引き立たせる。

スーツをキッチリ着こなして、ネクタイも曲がっていない。

注目を浴びるのに慣れているのか、中森君は涼しい顔で真っ直ぐ前
だけを見据えて歩く。

会議に参加するのは初めてだけど、質問責めとかしない子で良かった。

去年の新人社員の一人がすぐ誰かに聞いてしまう子だったから、先
輩とかが苦労していた。

新人を欲しくなかった理由の一つでもある。

「あ。」

近道をしようと前に使っていた席の近くを歩くと、同僚の磯村と視

線が合った。

新人指導をしている最中だったらしいが、中森君が近づいたから振り向いた様子だ。

最悪だ。

何でこっち見んだよクソ。

パソコンから顔を離れたコイツに見詰められ、思わず立ち止まってしまった。

ゾワッ。

：ヤバイ、久しぶりに鳥肌全開。

ワイシャツの下がゾワゾワしてる。

粟立つ肌。

気持ち悪い。

気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い。

さっき食べた物が逆流しそう。

「……。」

「……。」

固まる体は動けなくて、さっさと会議室に行かないといけないのに、行きたいのに、全く言うことをきいてくれない。

おい、動けよ俺の体。

頼むから、早く。コイツも困惑しているようで、一ミリも視線を外してくれない。

僅かに開いた口から煙草の臭いがしたような気がした。

お前が見なきゃ、こっちは動けるのに。

俺を見るな観るな視るなミルな。

呼吸を忘れた喉が引きつり、背中が痛い。

微かに震える体。

何だ、コレは？

怖い、嫌だ。

イヤだ、嫌だ！
もう、やめてくれ！
死にそうだ！

トン。

「飯塚先輩、会議の時間が押しています。行きましょう。」
「あ、ああ…ごめん。」

背中に温かい手が触れたと思うと、横に並んだ人と同じ歩幅で一歩前に出る。

支えるように優しく押す体温に緊張していた体が解れ、廊下を出るとそれはそつといなくなった。

助かった…。

長い溜め息をついて、強く体を抱き締める。

腕の痛みが頭を冷静にさせてくれる。

よし、もう平気。

横にいた体は二歩ほど後退して、最初と同じ距離に戻った。

「出過ぎた真似をしてすみませんでした。」

「ううん、助かったよ。ありがとう。」

全く、自分は何をしてんだか。

ああいうのは久しぶりだったから、脳が対応できなくなっているのか。

駄目だな。

ダメダメだ。

前髪を掻き上げて頭を左右に振る。

上司として、先輩として彼の見本にならないのに。
早く気持ちを切り替えろ。

こんなんじゃない目標達成は無理だぞ。

ナメられたらどうすんだよ。

馬鹿。

「飯塚先輩。」

「何？」

「図々しいことはわかっておりますが、よろしいですか？」

仕事中無駄口を叩かない彼の珍しいお願い。

ゆっくりと後ろを見上げると、銀縁の奥に敬意を込めた瞳があった。シンと静まり返る空間。

真剣な口調がやけに大きく響く錯覚。

「私ではまだまだ力不足だと自覚しております。ですが、どうか背中では任せてください。貴女と肩を並べる時まで、それ以降も。私は尊敬する貴女の言葉を信賴しておりますから。」

「：口説き文句？ 珍しいね。」

「全て私の気持ちです。後、嘘は苦手です。」

思ったことをそのまま口に行っているのだろう。

語る言葉はとても心地よく、スツと耳に入る。

敬意の言葉はじんわり溶け込み、震えはもう治まった。女性の上司を嫌う男性は多いけど、そういう彼はそういう顔とか行動を一度もしたことがない。

誰もが認める秀才の彼の中で、努力しか取り柄がない凡人の俺の評価は高いからなのか。

よくわからないや。

教えたことを素直に聞き入れ、間違いを指摘すれば素直に謝るのは、俺が上司だからだと思っていた。

ひねくれて曲がった性格の俺と違い、高校生になった慎くん似て、彼はどこまでも自分の気持ちに真っ直ぐだ。

数ヶ月仕事を共にしてきたただだが、俺も彼が嘘を吐くような人間ではないことくらい知っている。

だから、自然と彼の言葉を信じている自分がいることを自覚した。けど、こんな直球な誉め言葉は苦手だ。

恥ずかしくなる。

周りがほぼ敵ばかりの会社に、新たにできた小さな居場所。

うん、悪くない。

「なら、これを期に実績や経験を沢山積んで、私より上に上がりなさい。中森君なら可能よ。」

私が背中を預けるのはそれから。」

「了解です。」

「それと、君のことは上司の次に信頼してるから。忘れないで。そろそろ行こうか。」

踵を返した背中に

「はい。」

と小さな喜びを含めた声。

荒れ狂う戦場の中心にたった一人、味方が加わった。
そんなむず痒い気持ち。

今日は珍しく0時前に帰宅。

晩御飯どうしようかな。

カルボナーラとかどうだろうか。

「ただいまー。」

「だっからお前えはもうちょい解りやすく教えねえのかよ!!!」

「充分解りやすく説明している。」

あらあら、リビングから慎くんの賑やかな声。

否、怒鳴り声が。

お友達を連れてきたようだ。

明日から期末テストらしく、今夜からお泊まり会をすると今朝寝惚けた慎くんが言っていた。

またあの紫の髪の男の子かな。

名前は確か、花田 京太くん。

本人は苗字が嫌いらしく、名前呼び。

京太くん、だよね。

間違えてたらごめん。

ガチャ。

「ただいま。」

「あ、おかえり冬樹さん。京太来てるぜ。」

「お邪魔しています。」

またこれから四日間お世話になります。これ、つまらない物ですが。」

「京太くんいらっしやい。わざわざありがとう。」

二人とも晩御飯は？」

紙袋に入った羊羹を受け取り、冷蔵庫にしまう。

スーツを脱ぎながら二人に何か食べたか聞くと、慎くんは首を左右に振った。

ということとは、まだなのかな？

京太くんを見ればコクンと小さく頷く。

「じゃ、着替えてからパパッと作るね。カルボナーラだけど、食べれる？」

「はい。大丈夫です。」

「んじゃ、ちよいとお待ちを。」

自室に入って着替えを始める。

スーツをハンガーにかけて部屋着を被ると、リビングから慎くんの明るい声が聞こえた。

勉強嫌いな慎くんが何やら叫んでいる。

「っあー！冬樹さん帰ったし、腹ぺこだから勉強終わり！！」

「食後に再開するからな。しまうなよ。」

「えゝゝ！？マジかよ！！」

「俺が誰の為に此処にいると思ってるんだ。しないなら帰るぞ。」

子供っぽい慎くんと比べて、京太くんは髪の色以外はマトモだ。

大人びた雰囲気、眉間に皺を寄せて全てを睨むような目付きの悪さ。

年上の俺に対しては敬語だけど、同年代の慎くんにはズバツと正論を言う。

何で髪の毛が紫色なのだろうか。

似合ってるけど、黒や茶色だったら普通の高校生なのに。

ま、本人の自由か。

髪の色が他と違う方がはぐれた時に見つけやすいし。

：いや、京太くんが迷子になるのは想像できないな。

迷子になるなら慎くんだな。

オレンジ頭なら搜索が楽そう。

うん、今度出掛けた時に試してみようか。

三人分のお皿を洗っていると隣に慎くんが並ぶ。

皿拭きをしてくれるらしく、泡を洗い流すのを皿拭きの布を握ってスタンバイ。

好意に甘えて彼に皿を手渡す。

因みに京太くんは入浴中。

「冬樹さん。今日さ、良いことあったの？」

「どうして？」

「：笑ってたから。コート脱いだ時。」

ポツリと零した言葉は小さくて、水の音が邪魔をして聞き取り辛かった。

でも肩が触れ合うほど近いから聞き零すことはない。

よく観てるなあ。

自分でも気づかないことを慎くんは気づいて、こっそり俺に教えてくれる。

心配していない風を装っているけど、行動一つ一つが気持ちを代弁しているから意味がない。

こういうトコを自覚していないってのがまた可愛く思えて、俺を喜ばせるんだ。

そのことを、君は知っているのかな？

ジー。

皿を丁寧に拭く横顔を覗き込めば、チラチラと盗み見され、最終的に皿で顔を隠された。

だが残念。

髪を結んでいるから赤い耳が丸見えだ。

何をそんなに恥ずかしがってるのか。

よくわからない。

相変わらず面白い子だ。

クスクス笑いながら皿洗いを再開する。

「そうだね。良いことはあったよ。」

「た、例えば？」

「んっとね、会議に成功したし、Gから中森君に助けてもらった。お昼も身内話で盛り上がって、京太くんから羊羹を貰ったし。

今日最も嬉しかったのは、家が暖かったことかな。慎くんや京太くんがいたお陰で賑やかだしね。」

「……俺なら、何時までも冬樹さんを待ってるし。」

頬を赤くさせてぶっきらぼうに言い放つ。

照れ隠しなのか眉間に皺を寄せている。

もう、こんなオバサン喜ばせても何も出ないよ？

貰ったばかりの羊羹ならあるけど。

「ベットで待っててくれる方が有り難いなー。もう私も年だから、慎くん持ち上げるのも一苦労なんだよね。」

「…………ごめん。」

「いいよ。慎くんの気持ちはわかってるから。ありがと。」

背中を丸めて縮こまる彼の頭を引き寄せて、小さくお礼を告げる。

そっと預けられる体。

恐る恐る握られた服。

伏せた瞼や真っ赤な顔、彼の存在に安らぎを感じて、幸せを胸に、静かに目を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7161y/>

先のことはわからない

2011年11月21日12時41分発行